5　研修員との交流食事会タイム・スケジュール

交流食事会タイム・スケジュール

時間	内　容	進行原稿
17:00	所長挨拶	それでは、ただいまより、研修員との交流食事会を始めたいと思います。 まず始めに、当中部国際センター所長の荻原より、一言ご挨拶申し上げます。 荻原所長、よろしくお願い致します。 （所長挨拶） ありがとうございました。
17:05	乾杯& 腹ごしらえ第一弾	それでは、さっそく食事会を始めたいと思います。この食事会は、皆さんに、当センターが受け入れております海外からの技術研修員の皆さんと交流してもらおうという意図が含まれております。従って、皆さんと研修員の方々に積極的にコミュニケーションを取っていただくために、ちょっとした仕掛けを用意致しました。題して、「ワールド・ビンゴ」ゲームです。優秀者には、豪華賞品も用意してございますので、皆様奮ってご参加ください。 では、まず始めにゲーム行います…と言いたいところですが、みなさん、今日一日散々頭を使い、お腹も空いていることと思いますので、まずは乾杯と腹ごしらえをしたいと思います。 これから、腹ごしらえタイムとして 10 分間、時間を取りたいと思います。それでは、みなさん、飲み物のご用意をお願い致します。 （各自、グラスを持ってもらう） 全員に行き渡りましたでしょうか？ それでは、乾杯の音頭を、当センター業務課・課長の興梠より取らせていただきたいと思います。 興梠課長、よろしくお願い致します。 （興梠課長、乾杯の掛け声） それでは皆様、しばらくご歓談ください。 尚、この後のビンゴゲームの参考になるかも知れませんので、生徒及び先生の皆さんは特に、積極的に研修員の方々とお話ください。
17:20	ビンゴゲーム第一弾	はい、10 分経ちましたので、ここで一旦皆様には箸を置いていただきたいと思います。これから、先ほどお話しましたビンゴゲームを行いたいと思います。 まず、生徒と先生の皆さんには、二人ずつのペアになっていただきます。私が名前を読み上げますので、呼ばれた方から順番に前に出てきて並んでください。 （名前を読み上げる）

		それでは、これから各ペアにビンゴシートと筆記用具、そしてヘルプカードをお渡しします。 （シート等を配る） 各ペア全て、ビンゴシートと筆記用具、ヘルプカードが行き渡りましたか？ では、これからゲームのやり方を説明します。 皆さんがお持ちのシートの各マス目には、研修員の方々に事前にアンケートを行った質問の答えが書いてあります。その答えの主を探し出し、見つかったら、名前の欄に、その人の名前を聞いて書き、その人から出身国の国旗のシールを受け取り、名前の横に貼ります。 （サンプル提示：※サンプル作成） 答えに対する質問の日本語及び英語の文例が、壁に張り出してありますので、英語が苦手な方、あるいは答えに対する質問が分からない方は、そちらを参考にしてください。また、どうしても困ってしまった場合は、この場にJICAの職員が十数名おりますので、ヘルプカードを使用して、助けを求めても構いません。ただし、手持ちのカードがなくなった後は、自力で会話してください。尚、JICA職員は、この名札（手に持って例示：※名札用意）を付けています。 ビンゴのマス目の真ん中は、フリースペースです。 タテ・ヨコ・ナナメ、いずれかが揃ったら、「ビンゴ！」と叫んで、このステージまで来てください。正解していたら、賞品を差し上げます。これを時間まで繰り返します。何度ビンゴしても構いません。 なにか質問はありますか？ ・・・ それでは、さっそく始めたいと思います。 ・・・用意、始め！
17:40	腹ごしらえ第二弾	はい、ではここでビンゴゲームを終了したいと思います。 （成績発表） この後は、再び10分ほど腹ごしらえタイムを取り、その後、代表の生徒さんによる各校紹介、及び、研修員の方による余興に入りたいと思います。
17:50	高校紹介	それでは、ただいまより、代表生徒さんからそれぞれの高校の紹介をしていただきたいと思います。代表の生徒さんは、前に出てきてください。 それではまず、○○高校の××さん、よろしくお願い致します。 （８校の紹介※予め順番を決めておく） ありがとうございました。
18:00	余興&歓談	続きまして、研修員の方による余興を行いたいと思います。皆さん、お食事は続けていただいて結構ですので、耳と目はステージに注目し

		てください。 まず始めに、〇〇国〇〇さんによる、〇〇をお送り致します。 （余興） 続いて、××国××さんによる、××をお送り致します。 （余興）
18:15	引き続き、歓談	〇〇さん、××さん、ありがとうございました。 それでは、引き続きご歓談ください。
18:25	締め	皆さん、まだまだ話も尽きないと思いますが、そろそろお時間となりますので、この辺りでお開きにさせていただきたいと思います。 最後に、当プログラムを担当している興津から、一言、ご挨拶申し上げます。 興津さん、よろしくお願い致します。 （興津さんによる〆）

6　研修員との交流食事会ワールドビンゴルール

高校生実体験プログラム
ワールド・ビンゴ　ルール・ブック

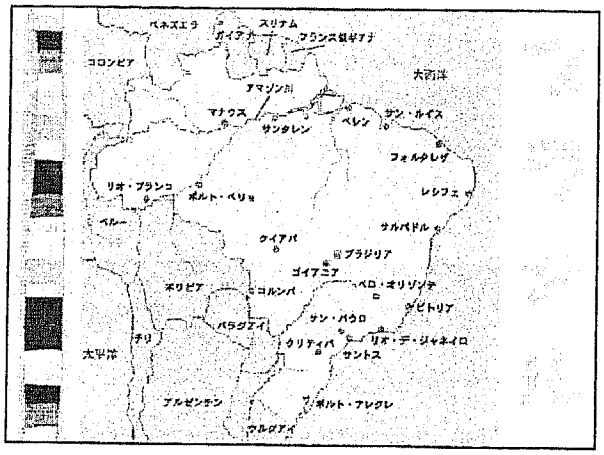
●ペアでビンゴカードを一枚持ってください。
●研修員に、予めアンケートを取っています。アンケートを元に、その回答が皆さんのビンゴ・シートに記入されています。
●各チームで研修員にインタビューをして、シートに記されている答を出した研修員を探してください。
●回答が見つかった場合は、研修員からシールをもらい、回答の上に貼っていきます。シールを貼る場所に研修員の名前を記入してください。
●一人の研修員へのインタビューから、複数の回答が見つかることもあります。しかし、一人の研修員からもらえるシールは一枚です。その場合、シールを貼る場所はチームで決めてください。
●より多くの研修員と会話をすることにより、シールが増えていきます。

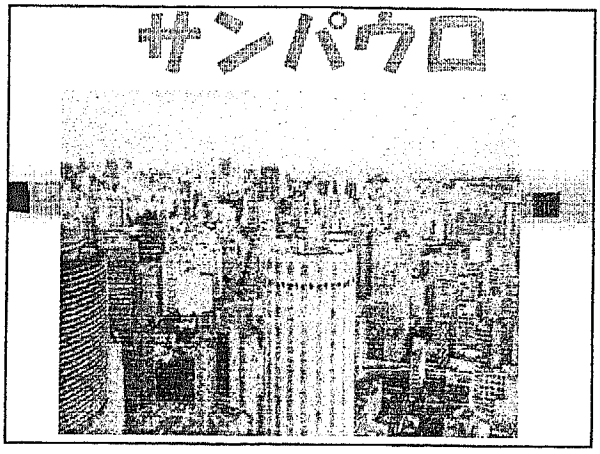
●多くのライン、シールを集めたチームには豪華商品を用意しています。がんばってください。

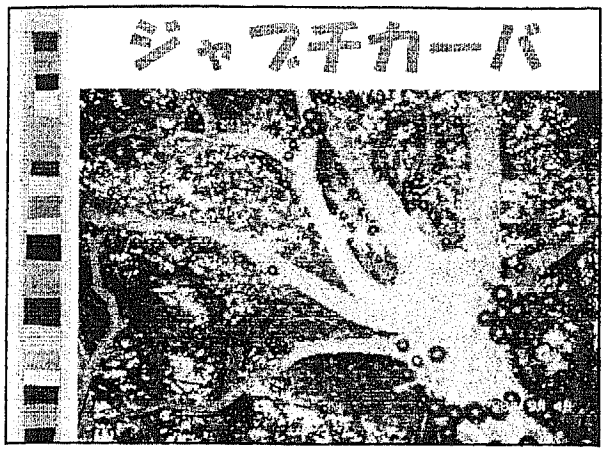
【お助けカードについて】
●英語での質問がわからない人には、壁に質問例がありますので、参考にしてください。
●各チームにヘルプ・カードが２枚あります。
●言葉がわからなくて、困ったときなどは、ヘルプ・カードを掲げて、「ヘルプ・ミー」と叫んでスタッフを呼んでください。
●これが言えれば、あなたが外国へ行って困ったときも安心です。

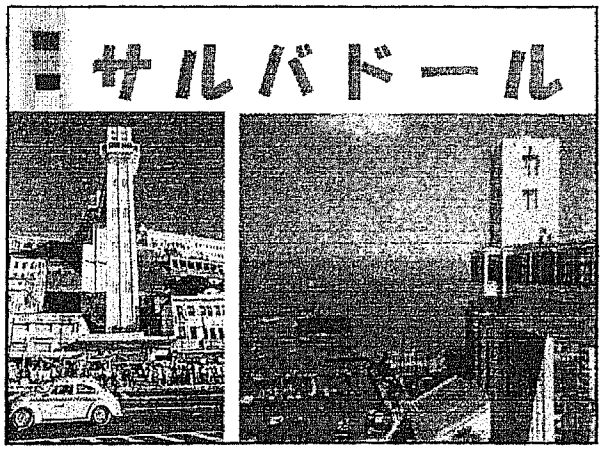
以上

7　「世界の食事を体験しよう（ブラジル）」パワーポイント 資料

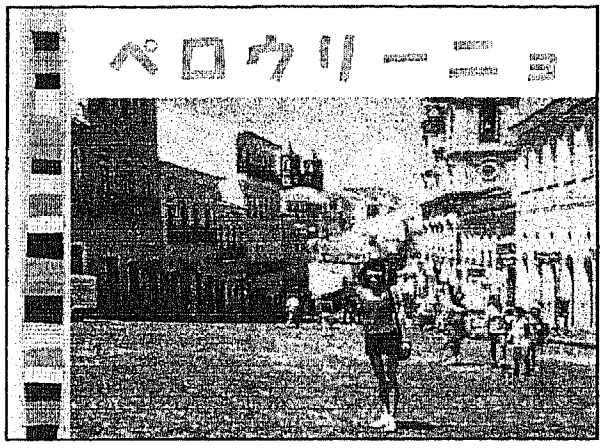





ジャスチカーバ

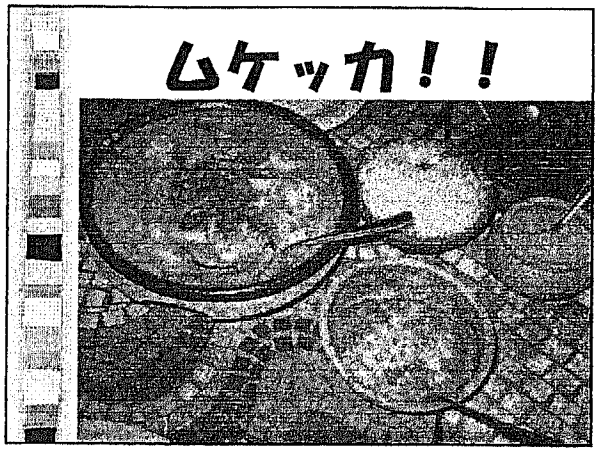

サルバドール

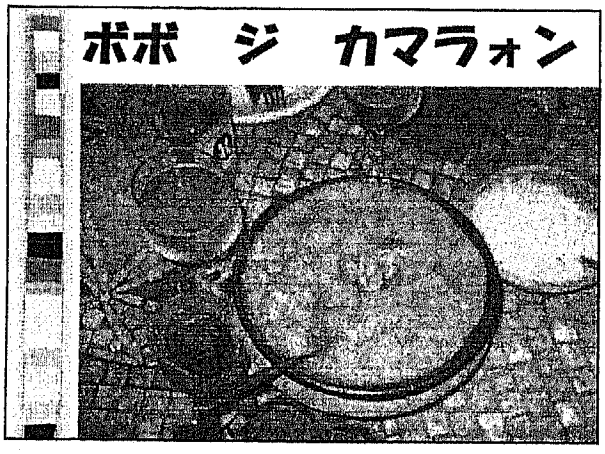
バイアーナ
haja fé

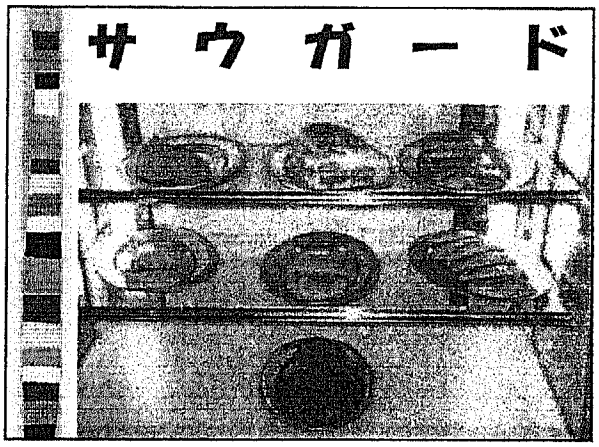

ペロウリーニョ

カポエイラ

「ジャポネーザ、１ヘアウ！」


ムケッカ！！


ボボ　ジ　カマラォン


サ　ウ　ガ　ー　ド

これ何してるの？？

8　プログラム参加者（生徒及び教師のレポート）

（1）生徒レポート（原文ママ）

愛知県立愛知工業高等学校

2年　幸治　忠寛

僕はこのプログラムに参加して、本当に様々なことを学べたと思います。なぜなら今まで知っていても真剣に考えなかったことをこのプログラムを通して真剣に考えることができたからです。

僕たちの学校は事前学習で環境について調べましたが、世界中の特に発展途上国で多くの問題が発生していることがわかり、それは他の学校の発表やケーススタディを通して、先進国の森林伐採がその多くの原因をしめていることがわかりました。また教育については識字率、ジェンダーについては「男だから」「女だから」という考え方、エイズについては感染原因や予防法について他の学校の発表を通して、またケーススタディを通して学ぶことができました。

さらにスモーキーマウンテンの下でゴミ拾いを仕事として生活する人々を映画で見ることやＮＰＯの方のお話を聞いたりして、本当に発展途上国の人々の苦しさを改めて実感することができました。

僕は、このプログラムで学んだことを今後の生活にどの様にいかしていくことができるのかという点を考えました。その結果、今できることとして、リサイクルや節水、物を大切に使うといったことにより、地球環境を少しでも良くできたらと思います。また将来のためにできることとして、国際協力に携わる人の中にダイエットの指導をしていた方が自分の得意な面で国際協力できるということが言われていたので僕は情報技術で主にコンピューターの勉強をしているので今、真剣に勉強に取り組んで、機会があれば国際協力にそうした分野でできたらなぁと思います。

最後に、こうしたプログラムを提供して下さったＪＩＣＡの方々に感謝します。

2年　畑中　亮介

今回僕はこの高校生国際協力プログラムに参加して多くのことを学ぶことができました。

僕は今まで国際協力についてはまったくといっていいほど無関心でした。しかし、今回このプログラムの 3 日間の間に国際協力に携わる人達の話を聞き、

ケーススタディなどで、同じ高校生の皆と話し合ったことにより今までより国際協力に興味をもつことができました。ケーススタディでは、皆と青年海外協力隊について話し合った。この青年海外協力隊では保健士や日本語教師だけでなくバレーボールやコンピュータ技術などさまざまな職種があることがわかった。また、その人たちは、発展途上国へ行き、学校へ行きたくても家から遠かったり道路がきちんと整備されていなかったりして学校へ行くことのできない人に勉強をおしえたりしています。そのほかにも勉強だけでなくケーススタディの時に話しあった高野康子さんのようにその土地に住む人々のすばらしい手工芸品などを商品化し少しでも現金収入を増やそうと努力している人もいます。僕はこう言った話を聞いて、僕たち先進国の人間が途上国の人たちのことを理解し技術など個人がとくいとすることをもっと伝えるべきだと思った。この世界にはゴミの山の中で生活しているような人もいるのだ。だからこそなんの不自由ない生活をおくる日本のような先進国の義務であると思う。そしてそれはけして難しいことではないと思う。自分がとくいな、好きなことがそういった人たちの助けとなることができるのであれば、僕はぜひそういったことに参加したいと思った。

2年　伊藤　綾

私が「高校生国際協力プログラム」に参加した理由は先生に「行かないか？」と言われたからで、自分からすすんでっていうわけじゃなかった。少し「めんどくさい」とも思ってました。そして合宿１日目、他の学校の子とかもたくさん来ていてドキドキしながら参加していました。自己紹介のときは誰に話しかけようか一人でオタオタしてました。でもみんな積極的な子ばかりで、そんな光景を見ていたら「自分も積極的にならなっくちゃ」と思い、いろんな子に声をかけて自己紹介しました。「調べてきた事発表会」はすごく緊張しちゃって終わった時にはとても疲れました。１日目はドキドキがたくさんありすぎて「楽しい」って感じてる余裕はありませんでした。合宿２日目、ケーススタディはしゃべった事もない他の学校の子といろいろ話し合って、新聞をつくって、発表する。研修員との食事交流会、外人さんと食事をしながらおしゃべり。２つともあまり経験できない事だから、すごくよかったです。２日目は緊張したけど「楽しい」という気持ちの方が勝ってしまいました。

合宿最終日、国際協力に携わる人の話をきいて、その人達の自分から何かしようという積極的な行動力にすごいと思った。あと、苦しんでる人々がたくさんいる事。発展途上国でも食べ物に困ったりしているわけじゃなくて肥満で困っている人々がいるという事。いろんな事を知る事ができました。ブラジル料

理も食べる事ができた。不思議な味だったけどおいしかったです。３日目もとても楽しかったです。

最初の１日目はとてもツラかったけど、２日目、３日目ときてみて、すごく楽しくて終わってしまうのが悲しかったです。この 3 日間は私にとって、とても充実した 3 日間になりました。またこういうプログラムがあったら参加したいと思いました。あと、少しでも苦しんでいる人の力になりたいと強く思うようになりました。本当にとても良い経験になりました。

２年　伊藤　奈津子

25 日（月）から２７日（水）の３日間、ＪＩＣＡがどんなことをしているのか少しわかりました。初めは私はＪＩＣＡのことなんて全然知りませんでした。先生から聞いたときも何がなんだかさっぱりでした。でも参加してみて、初めてＪＩＣＡが開発途上国を中心に、世界各地を支援したり、青年海外協力隊を派遣して現地の人にいろいろなことを、教えに行ったりしていることが分かった。このプログラムに参加して、ちがう県の人たちとも、友達になれた。研修員の人たちと交流食事会の時、民族衣装を着て自己紹介の時、すごく緊張した。そして、そのあとのビンゴゲームで研修員の人たちに英語でしゃべるのに苦労しました。隅の壁に貼ってある紙に質問の例（一番短いもの）を覚えて質問をしていました。あとはみぶり手ぶりでなんとかなったと思う。あとはいろんな国の料理が食べれてとてもよかった。3 日目の昼食のブラジル料理でご飯にかけたものじゃなくて、こってりして、なんかイモっぽいものがあまり好きでありませんでした。でもおいしかったです。この３日目、ふだんでは食べない料理、研修員との交流、そしてたくさんの友達ができました。ＪＩＣＡの人たちや、インターンの人たちともたくさんの話ができ、１日目、２日目の発表でも、けっこう知らないことがあったのでこのプログラムに参加できてよかったです。いい経験、そしていい思いでになりました。

愛知県立東海商業高等学校

「JICA に行って・・・」

３年　杉浦　弘祐

最初、僕はとても不安でした・・・。
国際協力といっても、テレビで見たことあるだけだし、それに見てる分にはとても自分にはできるわけではないものだと思っていた。

それに正直なところそういうものは、はっきり言ってめんどくさい。確かに誰かを助けたり、手を貸すことはすばらしいことである。かと言って、自分がやりたいとは思わない。そんな考えのままでそんな大それた場所に行っていいものかと・・だが、そんな事を考えていたらあっという間に当日が来てしまった・・・汗　向こうに行くと、みるからにいかにもなかんじな雰囲気（どんな雰囲気？笑）が出ていた！最初に講堂（だったかなぁ・・・）に集められ、色々なことをやった。
まぁ、いきなり話は飛んで！（笑）一日目の見所は、なんと言ってもビデオだろう！「神の子」（あってるかしら）というドキュメンタリータッチで描いてある映画を見た。これは直実な感想は、そう！何と下の字幕が全く見えなかった！！だから、今はどういう状況なのかとかがさっぱり。だが、そのおかげでしっかり映像のほうは見れたので、内容はそこからつかむことができた。
感想は、前から知っていたことだがあまり気持ちのいいものではない。ごみの山で生活をしている少年、少女。そして家族。
これをいまどきの子供が見たらなんと言うのだろうか？きっと興味を持ちはしないだろう。日本という国がそういう国比べてどれだけぬるま湯につかっているのかすらわかっていないのが現状だ。
僕はこの人達に何ができるのだろうと考えた。
二日目には、研修員の人との英語でのコミュニケーションがあった。これはとても有意義な時間がすごせた。
三日目には、実際に国際協力してる人の話を聞いた。これはとても興味深かった。
その中でいろいろ考えさせられた・・・・。
そして、僕のなかでの結論は、僕の尊敬する人の一人である「西川きよし」の言葉で「小さなことからコツコツと・・」ということばがあるが、正にそれだと思った。
なにができるかじゃなくて、いまなにをするかだと！そう、それはどんなことでも簡単なことでも、国際協力になるんだと！！
それを学び、これからに生かしていきたい。そう思った今日この頃です。

「高校生国際協力実体験プログラム」

3年　鈴木　弘明

この話を初めて聞いたときは、「ふーん。そんなものがあるのか」程度しか興味を持ってなかったけど、実際に参加してみて大変有意義な時間が過ごせたと思う。

当日、私は「人見知りしないように頑張らないと！」と気合を入れて会場に臨んだ。

最初に講話があり、次にアイスブレーキング。私はおそらくこのアイスブレーキングの時間が一番輝いていただろう。そして各校ごとの発表があった。

私の高校は、エイズがテーマだったのだが、決行使い古されているので苦労した。テーマが身近なものじゃあなかったし。他の高校の発表で特に関心を持ったのは、教育とジェンダーです。実際外国ではしっかりした教育を受けられるのは数少ないらしい。教育を受けてないと、話は出来るが字が書けないし、文字も読めない。だから都に稼ぎに行っても、役立たずの烙印を押されたりするそうです。こいつはたいへんだぁ。

そしてもうひとつのジェンダーは社会の授業で言葉は聞いたことはあったが実際どんなものかはよく知らなかった。ジェンダーとは生物的性差じゃなく、社会的性差のこと。分かりにくいこのテーマを具体的な実例を含めて発表していたので、よく理解できました。

その後「神の子たち」というビデオをみた。これは政府の政策の劣悪さを浮き彫りにしていると思う。

まだ書きたいことが残っているが、書面の都合上このあたりで終わろうと思う。いろいろとお世話になりました。職員の方が撮ってみえた、ビデオや写真をわけていただけるとこの後の参考になりますのでよろしくおねがいします。

「新しい発見」

3年　田口　千尋

私にとってこの三日間は、とても貴重な体験になりました。知らない学校の友達や先生、国際事業団の職員の人たちといっしょに勉強するというのは、まったく初めての経験で、とても不安でした。最初は「早く帰りたい」とずっと思っていましたが、アイスブレイクという変わった自己紹介ゲームがおもしろくて、帰りたいという気持ちが少しなくなりました。

一日目から二日目にかけてケーススタディをやりました。初めは何のことかよくわかりませんでしたが、各グループごとに同じ課題を与えられ、それをみんなと話し合いながら一つの紙にまとめ、発表するという形でした。普段とはまったく違う形式でとまどいながらなんとか出来ました。やはりグループで協力しながら何かをやるのは大変だと思いましたが、そこから始まる人との交流も大切だと思いました。

その日の夜の交流会で友達がモンゴルの民族衣装を着て前に出ていたので、その間私は１人でとても憂鬱でした。違う学校の子とも話す絶好のチャンスで

したが、なかなか勇気が出せず、結局話せませんでした。その後にビンゴゲームがありました。そこでも違う学校の生徒とペアを組み、国際協力の人に英語で質問をしてシールを集めるというなんともおもしろいゲームをしました。みんなで競い合った結果、私たちのペアは惜しくも二位で、賞品はなんと JICA の T シャツでした。

このようにいろいろな気持ちが交差しながら二日間をすごしました。三日目の最終日には、もう一泊したいという気持ちが強くありました。こういうことなら少しでも多くの人と話していればよかったと思いました。でも私は、多かれ少なかれ新しい発見をたくさんしたような気がします。ここでのことを忘れず、これから生かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。次回この企画に東海商業が参加できなかったら私たちのせいですね。

「研修を終えて」

3年　南川　真裕子

どんなことをするんだろう、どんな子達が集まるんだろう、民族衣装着れるといいな、どんなもの食べれるのかな。私は先生からこの合宿の話を聞いたときからとてもワクワクして、夏休み前から胸を膨らませていました。

調べてきたこと発表会はうまくいかずもっと手順よく出来ていればと後悔。でも、他の学校の一部の子の話を聞くとおもしろくてわかりやすかったと言ってくれたのでとても嬉しかった。みんなしっかり調べてあって、とてもわかりやすかった。私の知らなかったことも、理解することが出来ました。質疑応答では、私の頭ではよく分からない質問がでたり、難しい返答があったり理解するのに時間がかかりました。

ケーススタディはみんなと話し合い、自分だけの考えにとらわれずいろいろな意見など聞けることができ、勉強になりました。この短い時間で普段考えていなかったことをいろいろ考えました。生活スタイルが違うことや、価値観の違いなど、開発途上国の国の生活は楽じゃないけど、力強く生きているのを見て私も頑張らなきゃと元気付けられました。

口だけではなく、きちんと行動しているみなさんはすごいと思います。「自分に出来ること」を考え、それを形にしていてすごく尊敬しました。この三日間はとても短かったです。でも、私の知らなかった多くのことを学ぶことができました。とても緊張した三日間でしたが、充実してました。今回の合宿に参加できて、よかったです。ありがとうございました。もし、よろしければ合宿中の写真やビデオを送っていただければ今後の後輩の活動の参考や私の思い出になりますのでよろしくお願いします。

私立大成高等学校

「国際協力について」

2年　森　大祐

僕は、今まで国際協力というと、青年海外協力隊のイメージしかありませんでした。

しかし、今回「国際協力実体験プログラム」に参加して、国際協力にはもっと多くの団体があることがわかりました。また、それらの団体でも同じ事をしているのではなく、研修生の派遣や学校設立など様々であることもわかりました。

その中でも一番驚いたことは、トンガに青年海外協力隊として行っていた人が話していたことなのですが、ダイエットの指導です。僕は今まで青年海外協力隊というと、学校を設立したり、砂漠地帯に植林したりということしか思っていませんでした。しかし、その人の話によると、青年海外協力隊というのは、自分のできることを伝えればいいとのことでした。例えば、ふえが教えれるとか、体育が教えれるということです。

ただ、その時に気をつけなければいけない事は、自分の国の文化などを相手に押しつけないことです。なぜなら、それぞれの国には、それぞれの国の価値観があるからです。ケーススタディで学んだことを例にしますと、フィリピンのパロー村では、女性・子供が働いて男性はぶらぶら遊んでいることです。日本ではこのような事は考えられません。他にも、トンガにダイエットに指導に行った人の話を例にしますと、トンガでは女性が足を広げていることはいけない事だそうです。だから、馬飛びを教える時には、大変だったそうです。

僕が、今回「青年海外協力隊」をテーマにしたのは、テレビや電車の中の広告を見て、参加してみたいと思ったからです。自分の好きな事で、人を手助けできるというのはすばらしいことだと思います。これから、身近な事から、世界で困っている人を助けれたらいいなと思います。

2年　西村　飛俊

今回のプログラム参加で学んだ事は多くあるが、一番収穫があったと思うのは国際協力理解である。

元々、国際協力などに金を傾けることがもったいないと思うような自分だ。そこにあふれている思いは偽善であったり、何かしらの自己利益があるからだったりするのだろうと思っていた。

しかし、国際協力に携わる人達の話を聞くと、どうもそうではないらしい。

ケーススタディの話の人も、発展途上国の現状を知った経験から青年海外協力隊を志していたし、最終日の国際協力員の人たちも、それぞれに動機は違ったと思うが、何よりもまず「少しでも自分の能力を他人の為に役立てたい」という思いで発展途上国へ向かったことがよくわかった。

又、自分たちで調べた「ジェンダー」について知るいい機会にもなった。調べていくうちに、一概に性差を「ジェンダー」と呼ぶのには少々無理があるような気がした。果たして言葉も文化も、もちろん考え方も違う国に自分たちの考えを押しつけてもいいだろうか、そんな気もした。

国際協力員の人たちを見ていて、自分の持っている何かしらの能力が一つでもあれば国際協力が出来る事がわかった。また、実際に携わってみたいとも思うようになった。ならばどうすればいいのか、考えた結果、僕は今持っている夢をちゃんと実現しようと思う。その夢が、もしかしたら途上国が欲している技術なのかもしれないし、もしそうだとしたら僕は国際協力ができるから。何にせよ、まずは自分の身くらい自分で養えなければ、他人に協力するなんて事は絶対に無理だと言う事だ。

多くの仲間ができ、また多種多様な経験をする事ができ、プログラムはすぐに終わったように感じる。来年は進学のため受験勉強があるが、夢実現への第一歩、そして国際協力の為の第一歩としてがんばりたい。

「ジャイカに参加して」

1年　岩井　映梨加

私達は、事前の調べ学習をして「ジェンダー」について調べました。コースも学年も違う先輩とグループを組んだので、はじめのうちは全く進みませんでした。それでも、必要以上に集まって発表資料を作ったり、発表内容を考えました。それでも完成したものは、本来の課題とは少し主旨が変わってしまっていました。

研修合宿初日、この日は発表でした。言葉としてみんなに思いを伝えることの難しさを、聞く側として話す側として改めて自感した。発表の内容としては、「ジェンダー」という普段聞き慣れない言葉だけれど、身近な問題であることが理解してもらえて、興味をもってもらえたので、とても多くの時間を費やしてつくりあげたことが、フルに活かせたと思い満足した。

ケーススタディーという学習方法も身につけた。学校も学年も違う人達があつまっての話あい。同じ班に同じ学校の人はいません。頼りにできるのは自分だけでした。不安でした。不安を通り越して、苦痛さえおぼえました。しかしそれも、初日だけでした。あまり話せないという状況は、あまり変わっていな

かったけれど、ピーンと張った警戒感は感じられず、和やかに進みました。

一番楽しみにしていた交流食事会。できるだけ色んな方と話そうと思っていたけれど、まず、話す速度が速いのと、単語が分からないのが多くて、会話がうまく成り立たなかった。

この研修は自分なりにとても有意義だったと思う。私が学んだのは人を思いやる心です。学校、学年、言語、母国、それぞれ違っていても地球に共存しているのは事実です。自分だけでなく他の人も学べれるようになることが、国際社会になっている中、最も当然なことであり、最も簡単な、必要最低限なことだと思った。

「私がこれからできる事・したい事」

1年　掛布　知里

私がまず、はじめに一番言いたいことは、「プログラムに参加できて良かった。」ということです。私は、このプログラムに参加する前は、自分の夢として、「医者」になりたいという漠然とした目標しか持っていませんでした。しかし、この三日間、色々な人の国際協力に関する意見を耳にしたり、ケーススタディでタイについて学んだり、話し合ったりしたり、研修員の方とお話したりする中で、私の目標は「医者になりたい。」という、漠然としたものではなく、「医者になって、将来ＪＩＣＡに入団し、国際協力がしたい。」という明確なものへと変わりました。この三日間だけでは、国際協力というものが、どれほど大変なものなのかは、正直まだ分かりません。しかし、この仕事はとてもやりがいがあるのは分かりました。自分が国と国との間でのかけ橋になれるこの仕事に、私は就きたい。そう強く思っています。

私はこの三日間が終わり、2週間ほどが過ぎた今でもまだ、あの興奮を心の中から取り除くことはできません。駅などで外国の人を見かけると、思わず話しかけたくなります。しかし、私はうまく英語で自分の意志を、外国の人に伝えることができません。「これでは将来入団できない。」と思い、まずは英語を今以上に勉強し、英検やトーイックを受験するという、身近なできることから、コツコツ努力することに決めました。目標が高すぎだと言われるかもしれません。しかし、私みたいな人間が、体当たり的な人間が一人や二人いてもそれは良いことだと思うのです。

このプログラムは、私を変えてくれました。自分の夢の中で行ったり来たりしていた私を呼び戻してくれました。「やればできる。」という言葉を、私は将来、心の中で噛みしめてるに違いありません。

十年後、私は「ＪＩＣＡ」にいます。

岐阜県立斐太農林高等学校

「ＪＩＣＡのプログラムに参加して」

２年　八反　明美

私は、今回のプログラムに参加させて頂きとてもいい経験ができました。国際協力と一口に言ってもイメージがわきにくく、実際に自分には何ができるのか、開発途上国の人達がどのような暮らしをしているのか、国際協力に携わる人達の活動はどのような内容があるのか、といったような疑問が多くありました。「国際協力に携わる人と話そう」というものでは、活動を始めたきっかけや、外国へ行き困ったことや喜びを感じたことなど詳しく知ることができました。「神の子たち」の映画では今現在、ゴミ山に住み食べる物にさえ苦労している姿を見ることができ、初めに思っていた疑問が解決されました。けれど、それと同時に複雑な気持ちになりました。なぜゴミ山に暮らさなければいけない人がいるのか、外国からの援助はあるのに国内では何もしないのか、援助しているといっても現地の人達は本当に助かっているのか、と思いました。けれど、ＪＩＣＡの人達が一生懸命なことはわかりました。そして楽しそうでした。きっと自分のやりたいことを仕事にしているからだと思いました。私も自分のやりたいことを仕事にし、仕事をお金を稼ぐだけの物にはしたくないと思いました。

もう一つ思ったことは、英語の必要性です。研修員の人達と会話する中で、英語の対する苦手意識があり、言葉がなかなか出てきませんでした。伝えたい気持ちはあるのに知識がなく思い通りに伝えられませんでした。英語はいずれできるようになるだろう、とのばしのばしにし、努力することを避けていました。だけど、それではいけないと思いました。これから自分の夢のためにも将来のためにも絶対に必要になることなので自分から取り組んでいきたいです。

今回は、参加させて頂きありがとうございました。

「JICA プログラムに参加して」

２年　平林　麻理子

私は今回のプログラムに参加できて、とても良かったと思います。私は今までにも、開発途上国についてのテレビなどを見たことがあったので、生活状況などを知っているつもりでしたが、現地のビデオや国際協力に携わっている人々のお話を聞いて、私は開発途上国のほんの一部しか知らなかったのだと、思い知らされました。

国際協力に携わっている人々のお話を聞いて、私の思っていた”国際協力”が近いものになりました。以前までは国際協力と聞くと、なぜか、私には関われないものだと決め付けていたのですが、私にも何かできるのではないかという気持ちになりました。開発途上国の生活は、私の思っていた以上に厳しいもので、それに比べて私たちの住んでいる日本は、とても豊かで贅沢だと思いました。しかし、私たちは今以上の生活を望んでしまいます。これは、私と開発途上国の人達の価値観だと思います。私の出来ることは小さなことだけれど、そのことから考えてゆきたいと思います。今回参加したことにより、開発途上国について今まで以上に知ることが出来たし、もっと知りたいと思いました。この気持ちは私だけでなく、皆が持ったと思います。このように、先進国の人たちが開発途上国についてもっと興味を持つことによって、少しずつ変わっていくと思います。

また、このような機会があれば是非参加したいと思います。それまでに私の開発途上国についての知識を増やしていきたいです。

「JICA プログラムに参加して」

2年　野村　瞳

今回、JICA プログラムに参加して、開発途上国の今の現状を映画を通して知ることができ、私たちより裕福な生活をしていないと、その時実感しました。でもその貧しさにも負けずに必死に生きている姿を見てとても感動しました。私はこのプログラムに参加して良かったと思いました。参加前まで開発途上国の貧しさは身近に感じず、現状をぜんぜん知りませんでした。しかし、参加する前よりかなり身近に感じ、いままで知らなかった自分が恥ずかしかったです。

最初、『国際協力』と聞くと、とても大きい企画で私にできるのかなと思っていたけど、

小さいことでも国際協力になると知り、私も家や学校などで、できる小さなことでも積極的にやっていきたいと思います。それが、役に立っていることならとても嬉しいです。

私が『これは必要！！』と思ったのが『勉強』です。今の自分たちにも英語が必要だし、開発途上国の人々にもとても必要だと思います。その理由は、いろんな外国の人たちと交流ができ、お互い分かち合うことができるからだと思います。それに、開発途上国の人々にとって出稼ぎに行ってもなんでも仕事ができると思ったからです。

このプログラムの中に英語で会話をする機会がありました。私はどちらかというと英語は苦手なほうで、緊張して胸がドキドキしたけど、自分なりに頑張

ろうと思いました。今は日本の中で話して安心だけど、もし一人で別の国へ行ったら昔の私だったら逃げ出していると思います。でも今の私は積極的に会話し、お互いコミュニケーションをとっていると思います。

このプログラムを終えて、自分が以前より変わったような気がします。またこのような企画があれば参加したいと思います。

「ＪＩＣＡプログラムに参加して」

２年　平田　敦美

国際協力実体験プログラムに参加でき、私は、本当に良かったと心から思っています。

参加する前は、国際協力とは、どんなことをするのだろうという気持ちで、参加したプログラムでした。しかし、実際に話を聞いたり、ケース・スタディーや映画鑑賞などの授業を受けることで、自分たちの暮らしの豊かさや、私たちが、力になれることを自分なりに考え学べました。

今までは、単に世界には「食べ物がなくて食事も出来ない子がいるんだよ。」と親や学校の先生に小さい頃によく言われても「へぇーそうなんだ。」と他人事のように思っていた私が、今は、とても恥ずかしいです。このプラグラムでは、実際に貧しい国の現状や日常生活を深く知ることができて良かったです。

今回のプログラムで、一番印象に残っているのは、フィリピンのスモーキーマウンテン舞台となった「神の子たち」の映画でした。毎日、ゴミ山でゴミを拾ってそれで、収入を得て生活していて、食事は、ご飯塩をかけて食べる日もあれば、おかずが買えなければご飯だけ、タロイモだけなど、私たちの生活では、ありえない事だらけで驚きました。それに、私だったら、きっと絶えられないと思いました。そんな状況の中、家族のため自分のために、そして 、生きていくために必死で日々働く子供たちの姿を見て、心を打たれると同時に胸が痛みました 。また、この様な状況で、村の人たちの文化や価値観を考えながら、仕事をするＩＣＡＮの人たちは、すごいと思いました。そして、国際協力で大切な事は、その国の人々の文化と価値観を考えながら活動することだと、私は、思いました。

私たちの国も昔、とても貧しかったです。しかし、今は他国の支援、援助、協力のお陰で、ここまで豊かな国になりました。だから、今度は逆に、私たちが、開発途上国の力になる時だと私は思います。だから、コツコツ少しずつ、この様な国のために募金をしたり、色々な人たちに、今回学んだ事を伝えていけらいいです。

三重県立津高等学校

「国際協力実体プログラムに参加して・・・」

1年　大谷　美沙

「国際的」という言葉を聞いて、いつも私が思い浮かぶのは、「英語が話せる」「書ける」そういうことでした。でも今回、このプログラムに参加してその考え方は変わりました。

外国のある村では、子供が学校に行けないばかりか、その日の食料もないというのに、働くのはほとんど子供と母親だけで、父親はぶらぶらと村を散歩していると聞いて、すごくびっくりしました。

「そんなのおかしい。なんで働かないのだろう。父親が働けば少しは生活も楽になるのに」

私はそう思いました。でも、他の人たちの

「この村には、この村の文化がある。それを変えるのは難しいことだ」

という意見を聞いて、自分の価値観で考えたことを人にも押しつけてはいけないと感じました。

また、ゴミ捨て場で暮らして毎日ゴミを拾い、それを売って生活している人たちを見て自分の毎日とは、まるで別世界のように感じていました。食べ物も少なく、不衛生な生活をしているため病気にもなりやすいだろうに、そうなってしまっても、十分な食事もできず薬もないなんて・・・。

日本でなら簡単に治る病気でも、その国の人たちは命を落とすこともあるなんて本当に悲しいことです。

この3日間、たくさんの事を知りました。

そして、本当に「国際的」というのは、英語が話せるだけでなく外国のことも自分の国のこともよく知って、自分の価値観を人に押しつけずに相手のことを理解するように努力することだと思いました。

「高校生国際協力実体験プログラムに参加して」

1年　相須　麻由

私は高校生国際協力実体験プログラムに参加して本当によかったと思います。なぜならば普段できないような他校との交流やいろいろな体験をすることができたからです。

発表会では自分の学校で調べたジェンダーやエイズ、世界の環境・教育についての知識を得ることができました。ジェンダーという言葉は自分たちで調べるまでまったく知りませんでした。しかしこの体験をきっかけにジェンダーに

ついて調べ、自分のまわりにもたくさんのジェンダーがあることを知りました。

グループでの話し合いは、最初私は年上の人達の中でついていけるのかとても心配でした。でも、みんなとても良い人ばかりでとても楽しんで他校との交流をし、国際協力について話し合うことができました。

この実体験プログラムで「神の子たち」や「民族について」のビデオを見たり、実際に国際協力に携わる人に話を聞き、世界の状況を知り、みんなで話し合ったりして自分の生活を見直すいい機会になりました。今回のことで私が一番感じたのは「食べること」を心配しなくてもいい自分達は幸せなのだということでした。世界には食べることもままならなく、教育をうけたくてもうけられない人達がいる、そう思うと「この食べ物嫌い」、「勉強したくない」と言っている自分はとてもぜいたくで、恥ずかしく思います。

世界の状況を知ったのでこれから私は援助に関することがあったら協力し、今回学んだことをまわりの人に教えて、物の大切さや援助の大切さを伝えていきたいです。そしてこれからもこういうことに興味をもって積極的に参加し、みんなで話し合った解決策の中で自分にできることはやっていきたいと思います。

「高校生国際協力実体験プログラムに参加して」

1年　今西　由佳

今回、高校生国際協力実体験プログラムに参加して、本当によかったと思っています。初めての事がいっぱいあってとっても楽しかった。

ケーススタディでは、今まで深く考えてなかった事や身近な所からでも、国際協力につながるということを学びました。なかでも、一番記憶に残っているのは、「もし森林がなくなったら」と言うタイトルで、グループのみんなと話し合った事です。「もし森林がなくなったら」なんで今まで考えた事もなく、すごく新鮮でよかったです。それに森林の大切さをあらためて考えるきっかけとなりました。

その後に話し合った「森林がなくならないために」では、すごく身近ですぐ出来ることが多く、こんなことでも、国際協力につながるんだと、思うことができ、色々な事をやってみようという気になりました。

一番楽しかった事は、2日目の研修員さんとの交流食事会です。なんといっても、料理がすごくおいしい！色々の国の料理が食べられて、とても幸せでした。

ビンゴゲームでは、色々な人と話ができ、通じた時は、本当嬉しかったです。

自己紹介の時は、すごく緊張したけど、いい経験になったと思います。ダンスした時は、恥ずかしかったけど、楽しかったし、今思うと、あの時おどって

おいて、良かったなぁと、思ってます。

最後に一番勉強になった事は、映画鑑賞で観たゴミの山に住む人々のことです。映像ではあまり伝わってこなかったが、ゴミの山という悪臭・不衛生の中、毎日暮らしているなんて、私には全く想像つきませんでした。世界には、色々な環境に暮らしている人々がいるけど、ゴミの山で暮らしているのは、初めて聞いてビックリしました。私が、いかにぜいたくな暮らしをしていたんだなぁとあらためて気づかされました。

このプログラムに参加して学んだことを忘れず、普段の生活から自分が世界のためにできることを考え、実践していきたいなぁと思っています。本当に、このプログラムに参加できて、よかったです。

「私が学んだこと」

1年　尾市　沙弥香

ゴミの山で生活している人々。学校に行かず働いている子供達。世界にはさまざまな状況におかれた人々がいることを学びました。その生活は私達のように欲しい物がすぐ手に入るような楽なものばかりではないことも知った。決して楽とは言えない暮らしの中、家族で協力しあい、一生懸命生きていこうとしているのが痛いほど伝わってきました。それでも栄養不足などのために亡くなっている人がいると知り、とても悲しくなりました。そして私の毎日の生活はとてもぜいたくなものだと思いました。「学校に行くのがめんどくさい」とか「勉強したくない」と文句を言っていた自分がとても恥ずかしくなりました。

私はこのような人々を助ける団体についても多くのことを知ることができました。今まではとても大変な活動をしていると思っていて、絶対自分には何もできないと思っていました。でも、実際に話を聞いてみると身近なことでも協力できるということを知ることができました。だからこれからは私にできることをどんどんさがしていきたいと思いました。世界にはまだ楽といえない暮らしをしている人がたくさんいると思います。少しでも多くの人が幸せになれるように努力しなければいけないと思いました。そのために、少しでも世界のいろんな国の状況を理解しておくべきだと思います。一部の人だけがお金を持っていて裕福な生活をするんじゃなくで、みんなが楽しく暮らせる日がこればいいと思いました。

静岡県立長泉高等学校

「国際理解の集い」

3年　加藤　弘亮

僕達の学校には国際理解の集いというものが年に１回あります。平成１４年度の集いにはアフガニスタン出身で島田市で医師をしているという先生をお招きしてお話をうかがいました。それまでの僕は国際理解について他人事のように考えていましたが、そのお話を聞いてから真剣に国際理解について考えるようになりました。

その医師とはレシャード＝カレッドという先生で幼い時に医師になると決め、日本に渡り日本語と医師の勉強をし、再び祖国アフガニスタンへ戻り、そこで医師として活動した時の体験や先生の感じたこと、思ったことをお聞きしました。先生のお話には僕達よりずっと幼い子供達が貧困で飢えや病気で苦しんでいるというお話が多く、特にレストランの影で食べ残しを待つ子供達や汚い水たまりの水で兄弟のおしめを洗っている少女の話を聞いて当たり前のようにお腹が空いたら食べたり、水を飲んだりしている自分を思うと心が痛みました。

それから半年後、僕は国際協力事業団（JICA）の青年海外協力隊を知りました。自分の持っている技術を生かして貧しい生活をしている人々を助けることをしているのか、ということを知り、自分も協力してみたいと思った時、果たして自分にはそういった技術を持っているのかという事を思いました。そしてそれを持つには今の僕には少し時間がかかるのだと思いました。そのために今の自分にできることを精一杯やることに気付きました。

「国際協力」人の為に何かをして尽くすのを身近な人にしてあげるのも大変なのにそれを世界規模でやるのは、もっと大変なことだと思いました。そして僕は考え方や精神面等いろんな面でまだまだ勉強不足です。これから自分の将来に向けて勉強し、様々な経験をして、今自分が関心のある英語の勉強を通して、それが発展途上国の子供達に役立てられるようになったらいいと思っています。

「自分が考える国際理解」

3年　望月　潤

僕が考える国際理解というものは、まず一つ、個人個人の気持ちの持ちようだと思う。国際理解というものは少し冷めた人から見ると、同情のかけ合いだとか、偽善者の個人的な優越感を満足させるだけという事を多少思うかもしれない。ですが、僕はそれでもいいと思う。自分が何一つ不自由なく暮らしていて、とても貧しい人をその人は、かわいそうに思い、同情した。そしてその人

は自分の気持ちを満足させるために、お金をあげた。又は、ご飯を食べさせてあげた。なにかそこに一つ考える人もいるだろうが、僕はその関係自体を、別におかしいことだとかは思わない。むしろそのことを素晴らしいとも思うだろう。一人の困っている人を助ける。その困っている人から見れば、とてもその人が素晴らしく、輝いて見えるだろう。そんなことは関係ない。その人がした事として残るものは、一人の貧しくて困っている人を助けたという事実と困っていた人達への感謝だと思う。僕はさきほど気持ちの持ちようだと言いました。それじゃあおかしいじゃないかと思うかもしれません。ですが僕が言いたいのはその人がどう思っているかを言っているわけではなく、理由はどうあれ、その人は貧しい人を救った。その助けるか助けないかを決定づける気持ちが大切だと思う。その大半の人は困っている人がいるとかわいそうだと思って助けてあげようと考える。ですが大半の人はそこまでで終わってしまうでしょう。その時に理由はどうであり助けるという選択肢を選ぶだけの気持ち、つまり、勇気のようなものが必要なんじゃないかなと思う。その勇気のようなものを持つことを考えていこうと思います。

「共感と同情」

3年　川口　あずさ

今回、高校生国際協力実体験プログラムに参加して、いろんなことを私は吸収した。事前に調べた教育問題から、世界には行きたくてもさまざまな理由で学校へ行けない子供たちが実に多いことを知り、他の学校の発表からエイズや環境問題、ジェンダーについて学ぶことができた。今回このプログラムに参加していなければ、世界が抱えているさまざまな問題にも無知識のままで、“日本”という狭い視野の中でしか世界を見ることが出来ず、私に出来ることといえば本当にちっぽけなことで、それを実行したからといって何が変えられるだろう･･･という考えのままだったかもしれない。そんな中、ケーススタディは「私たちに何ができるか」について改めて考えさせてくれる絶好の機会だった。森を失くさないために何が出来るかでは、グループ内でもさまざまな意見が挙がった。紙のムダ使いをしない。温暖化防止のためエアコン温度は 28 度に保つ、など。ここで挙げられたのは私が先程言った「実行しても変わらない」ことなのかもしれない。しかし、そういう小さなことからはじめるしか道はないのだ。ということに気付かされた。環境について発表したグループでとても心に残った意見があった。

「切った材木を使うのは先進国なのに、自分の庭は汚さず途上国の木ばかりを切っている」

というものだ。地球温暖化によるサバク化や森林減少等の環境問題は、原因のほとんどが先進国にあると言っても過言ではないと思う。途上国を苦しめてしまうのも、手をさしのべてあげられるのも、結局は先進国なのだ。だから私は森が守られることを願って、そんな小さなことから初めていきたいと思う。そしてここでの体験を忘れず家族や友達などに話してあげたい。その人たちもまた身近な出来ることを始めてくれたら、それは大きな力になると思う。そして今回の体験で知った、

「かわいそうだから、こういう事をしてあげよう」

と勝手な観念でおしけるのではなく、お互いの文化や生活感を受け入れ、尊重し合うことの大切さをいつも頭に入れた上でこれからもボランティア等に参加していきたい。それから、学校へ行けない、貧しいというだけで「かわいそう」と決めつけない。「共感」と「同情」の違いをよく知って、接していくことが私を含め、たくさんの人が出来るようになれたらいいと思う。

「プログラムに参加して」

3年　石川　可奈絵

今回、実体験プログラムに参加して改めて、日本の裕福さ、ボランティアの大切さ、そして価値観の違いを知りました。ケーススタディでとりあげたタイのパロー村の生活は、私たちの生活とはかけはなれたものでした。日本では、まず夜8時頃に一家全員寝て、朝は母親以外5時頃起きるとゆうことは、まず考えられず、ましてや父親が働かずに村を一日中ぶらぶらしているのなんて、想像もつきませんでした。日本では父親は働き、子供は学校へ行くというのが当たり前ですが、パロー村では父親のかわりに子供が家畜の面倒をみたりなど子供への負担が多いと感じました。

しかし、かならずしもそこの子供は貧しいとは思っていなく、ましてや、この村では父親が働かずにぶらぶらすることが一番の幸せだという。その価値観の違いに私はとても驚いた。ジェンダーの問題があるとしても価値観の違いによるものだと言われたら、それまでなんだなぁと実感した。

職員の方の話の中で、自分が感じたことは、今までボランティアというものは、協力するなら募金。それ以外はできないのだと思っていたのが大きな勘違いだったということです。今までは、募金が一番大切なことだと思っていました。やはりお金がないとなにもできないというのが頭にありました。しかし、実際には、確かにお金も必要でしたが、それ以外に技術者の派遣やその土地の人の協力などがないとたとえお金があっても仕方がないのだと思いました。

他にもダイエットの仕方を教えるために派遣されたりなど意外なことが多か